第31回可視化情報シンポジウムの開催にあたって

社団法人 可視化情報学会
会長 辻井 剛

Message to the 31th Symposium on Visualization

Tsuyoshi Tsujii

第31回可視化シンポジウムの開催にあたりまして、一言ご挨拶を申し上げます。

昨年、2002年度のノーベル賞では、日本人が3年連続して受賞し、しかも2名が同時に受賞するという快挙に、私たちもその喜びを共にすることができました。人類が挑戦し続けてきた高度な物理学や化学などの輝かしい業績を、各種の報道や出版が一般の人にも分かるよう、要領よくビジュアルに伝えています。そして、それらを多少とも理解すると、積み上げられてきた業績が可視化の技術と密接な関わり合いを持っていることを、改めて強く感じます。

ノーベル物理学賞を受賞された小柴昌俊博士は、地下1000メートルの素粒子観測装置「カミオカンデ」に取り付けた1050個の光電子増倍管を用いて、約16万光年離れた大マゼラン星雲に超新星が現れた際に放出されたニュートリノを世界で初めて観測したことが、理学と天体物理学への貢献として評価されました。(ニュートリノに関連して、4年前の本シンポジウムで特別講演がなされています。)

ノーベル化学賞に輝いた田中耕一博士の研究は、高分子であるタンパク質の質量分析という、長い間科学者たちを魅了し続けてきた目標を現実のものとししました。博士は、タンパク質の分子をレーザーを使ってイオンレベルでとらえ、磁場での飛行時間によって質量を検出し、可視化する方法を考案しました。この業績は、新薬開発やがんの早期診断、食品中の有害物質検査など、今後の広い応用が期待されています。

このように、新しい分野での可視化の研究が進められ、それまでは手に入れることが困難であったデータが、知覚し理解しやすい形で得られるようになることは、学術のみならず、産業への応用や生活、文化、環境など様々な多くの領域での展開を通じて、人々に大きな意味をもたらすものと言えます。

今回のシンポジウムにおきましては、「全球化学天気予報と可視化」(滝川雅之氏)、「見えない“単分子膜”を可視化する」(加藤貞二氏)、「Web メディアを利用した対話型三次元ビジュアライゼーション」(山口玲央氏)という3件の大変に興味深い特別講演を企画しております。また、最先端の可視化技術に関する多数の研究発表が予定されており、これらは21世紀の可視化情報学の裾野を広げると同時に、峰々の頂上を押し上げることに寄与するものと考えております。

最後になりましたが、本シンポジウムの企画、開催、運営にあたり、多大なご尽力を頂きました太田正廣委員長をはじめ、シンポジウム委員会の委員各位、工学院大学及び関係の方々にはあらためて厚く御礼を申し上げます。

第31回可視化情報シンポジウム実行委員会：太田正廣(委員長；東京都立大学)、村上和彦(幹事；東京都立大学)、飯田明由(工学院大学)、植村 健(旭硝子(株))、岡本孝司(東京大学)、木村元昭(日本大学)、佐野正利(千葉工業大学)、嶋田健司(清水建設(株))、平原裕行(埼玉大学)、星野邦弘(海上技術安全研究所)、三神史彦(千葉大学)、山形 仁(㈱東芝・医用システム社)、湯浅肇(ロイヤル機器(株))

オブザーバー：大島裕子((株)リコー)、坪井伸幸(宇宙科学研究所)